



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	シベリア内戦とブリヤート・モンゴル問題
Author(s)	生駒, 雅則; Ikoma, Masanori
Citation	スラヴ研究, 41, 189-216
Issue Date	1994
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/5226
Type	departmental bulletin paper
File Information	KJ00000113375.pdf



シベリア内戦と ブリヤート・モンゴル問題

生 駒 雅 則

はじめに

ブリヤート・モンゴル人の居住地域は、イルクーツク総督府管下のザバイカル州（東部ブリヤート）とそれに隣接するイルクーツク県（西部ブリヤート）にまたがって存在していた。

1897年の調査によれば、ブリヤート・モンゴル人は約29万人で、ザバイカル州に約18万人、イルクーツク県に約11万人が居住していた。イルクーツク県では90%以上が農耕に従事し、40%以上がギリシャ正教に改宗していたが、ザバイカル州では80%近くが牧畜業に従事し、ラマ教信者が90%を越えていた⁽¹⁾。このように革命前夜の西部ブリヤートでは「ロシア化」の進展が顕著であった。

1989年の調査では、ブリヤート自治共和国総人口1,038,252人中、249,525人（24.0%）がブリヤート・モンゴル人で、農村に138,456人、都市に111,069人（首都ウラン・ウデに74,243人）が住む。この他にロシア共和国イルクーツク州に約81,000人（ウスチオールドィンスク・ブリヤート自治区49,300人、イルクーツク市7,000人）とチタ州に約66,600人（アギンスク・ブリヤート自治区42,400人、チタ市4,719人）が住んでいる⁽²⁾。

自治共和国が形成された1920年代半ばには、ブリヤート・モンゴル人が総人口の約半数を占めていた⁽³⁾が、1989年には24%にまで比率が低下している。このことはソヴィエト民族自治の下でロシア化がいかに行進してきたかを物語っている。

ブリヤートで移民が急速に増大したのは19世紀半ば以降のことであった。特にザバイカル州への移民は、東シベリア植民の先駆者ザバイカル・カザーク44,803経営（占有土地6,112,669デシャチーナ）と、1900年以前の移民である「古参住民」44,748経営（占有土地2,692,246デシャチーナ）、1900年以降に移民した「新規住民」3,411経営（占有土地70,000デシャチーナ）に分類される⁽⁴⁾。ここには経営単位での土地面積の大きな格差が見られ、カザーク対一般農民、「古参住民」対「新規住民」の利害対立があった。

ブリヤート・モンゴル人の土地は、ヨーロッパ・ロシアから入植した農民の土地確保のために、イルクーツク県で1887年から1917年の間にほぼ半減、ザバイカル州で1897年から1917年の間に608万デシャチーナから472万デシャチーナへと約三分の二に減少した⁽⁵⁾。このために農耕民と遊牧民の利害対立が顕著となっていた。さらに牧地の減少以外にも、日露戦争と第1次世界大戦期の家畜調達、革命後の内戦波及による混乱と飢饉、食糧徴発などで、ブリヤート・モンゴル人の中にはハルハ・モンゴル領へ逃散する者が続出した⁽⁶⁾。

こうした事情を反映して、ロシア革命当時にもブリヤート・モンゴル住民の間で反ロシア

的感情が強かったことは否定できない。

リンチノは、ブリヤート・モンゴル人が「シベリア全少数民族のうちでモスクワ征服者に対して最も頑強な抵抗を示した」ために「ブリヤート人の征服と最終的『講和』に丸60年かかった」こと、さらに「家内工業に従事し事態を家内工業的に狭くしか見ない地方ソヴィエト及び党のロシア人労働者たちによって、300年余りにわたって民族抑圧と奴隷化を蒙ってきた民族の民族的利益が、機転がきかずに無視されたが、その結果は共産党から広範な大衆を遠ざけただけであった」と記している⁽⁷⁾。

このように革命前夜のブリヤートでは、都市の資本家と労働者、農村の地主と農耕民、草原の聖俗封建領主層（ラマ、ノヨン）と遊牧民の階級的対立が、ロシア民族と「異民族」の民族的対立と結びついて、複雑な政治情勢を醸成していたのである。

この論文では、東西両ブリヤートの動向を中心に、それに南接するハルハ・モンゴルの動向とも関連づけて、内戦期の「ブリヤート・モンゴル問題」を検討することにしたい⁽⁸⁾。

I. ブリヤートにおける革命と内戦

1. ブリヤートにおけるロシア革命

1917年10月16日から24日までイルクーツクで第1回全シベリア・ソヴィエト大会が開催され、69ソヴィエトの代表184名が参加した。大会は、ボルシェヴィキ・左派エスエルのブロックが多数派を占め、シベリア・ソヴィエト中央執行委員会（ツェントロ・シベリ）を設置し、議長にB. シュミツキーを選出した。

11月19日には「イルクーツク軍事革命委員会」が成立したが、その構成員は、ボルシェヴィキのヤンソン（議長）ら3名と左派エスエルのタナナイコら2名であった。12月8日にイルクーツク士官学校生の反乱が起こり、21日にラゾーらの増援部隊の力を借りてこれを鎮圧し、イルクーツク市内にソヴィエト権力が樹立された⁽¹⁾。

ザバイカル州ではイルクーツク県と事情が異なる。1917年11月のザバイカル州での「憲法制定会議」選挙結果は、投票総数98,225票のうち、エスエル49,363票（50.2%）、ブリヤート民族委員会17,083票（17.4%）、カザーク12,854票（13.1%）、ロシア社会民主労働党国際派8,560票（8.7%）、カデット4,111票（4.1%）、メンシェヴィキ2,154票（2.2%）、「民族社会主義党」及び「旧教徒」4,100票（4.2%）であった⁽²⁾。この選挙でロシア社会民主労働党国際派の得票が10%を割るなど、ボルシェヴィキ組織は未成立であった。

このような勢力分散を受けて、1917年12月に各党連立の「人民ソヴィエト」が形成されたが、1918年2月に革命派ジガーリンの率いるカザーク連隊により「人民ソヴィエト」は解散せられ、ソヴィエト諸組織委員会が組織された。1918年4月下旬から5月上旬にチタで第3回ザバイカル州ソヴィエト大会が開催され、ザバイカル州人民委員会が成立した。その間にチタでボルシェヴィキ組織が形成された⁽³⁾。

ブリヤート民族委員会は、二月革命直後の1917年4月にチタで開催された第1回全ブリヤート人大会で創設された民族自治機関である⁽⁴⁾。その議長ダシ・サンピロンはアギンスク・アイマク出身のインテリゲンツィアであった。また後にブリヤート・ボルシェヴィキ指導者と

なる M. H. エルバノフもブリヤート民族委員会イルクーツク支部に参加していた⁽⁵⁾。

ベルリンは、このブリヤート民族委員会とその後セミョーフ支配期に創設されたブリヤート民族ドゥーマが、ブリヤート・モンゴル人が内戦で分散・絶滅しないようにするための防衛的組織であったこと、セミョーフ軍によるブリヤート・モンゴル人部隊の動員が、ドゥーマ指導者の一人を逮捕・銃殺してドゥーマとの協定に違反して強行されたことを指摘している⁽⁶⁾。これらは必ずしも「狭隘な民族主義」的統治機関ではなかったのである。

ブリヤート民族委員会イルクーツク支部では、イルクーツクでの12月の諸事件とソヴィエト政権の樹立後、社会主義革命とソヴィエト政権に対する評価で意見の不一致が生まれた。ボルシェヴィキの II. ダンチノフ、左派エスエルの H. ザパノフ、II. ランピロフがソヴィエト政権支持の立場に移行してブリヤート民族委員会を離れ、また II. II. ランジュロフはセレンギンスク・アイマク自治機関を去ってトロイツコサフスク・ソヴィエトの活動に参加した⁽⁷⁾。なお1917年12月の時点では、ブリヤート・コムニストは M. M. サヒヤノヴァ指導下の小グループしか存在していなかった⁽⁸⁾。

1917年10月にリンチノは、ザバイカルの農民大衆が、優良地を所有する彼ら農耕民とは全く異なる分与地を牧畜業を営む異族人が必要とすることを全然理解しておらず、大部分が農耕に全く適さない草原を20-30デシャチーナ所有しているだけで異族人を地主扱いしていると述べている⁽⁹⁾。

エフセニン、ブリヤート住民が独自の生活を続け、ロシアと異なる文化を持ち、ロシア人、大部分は新規移民、との共同生活に以前から重圧を感じていること、精神的物質的文化的相違や経済的利益の相違、入り組んだ土地のために、たびたび相互の無理解・誤解を生み、紛争・衝突に至っていることを指摘している⁽¹⁰⁾。

ボルシェヴィキのアルヒンチェエフも、ブリヤート・モンゴル人が、十月革命に対して敵意はないが無関心であったこと、牧畜文化の段階にあって階級未分化であること、ツァーリ圧政下でも民族文化と地方自治機関のホショー・アイマク制⁽¹¹⁾を保持し続けたこと、ブリヤート人民大衆が狭隘な民族主義的インテリゲンツィアの幻想にひかれて革命的インテリゲンツィアの努力が無駄に終わっていること、初期のソヴィエトが思慮を欠いてブリヤート人の土地を合法的に略奪したこと、1920年末に民族的名門出身者指導下の民族プチ・ブル的パルチザン運動が高揚し、これに対抗して赤軍第5軍指導下にブリヤート義勇軍が形成されつつあること、1921年現在ブリヤート人党員600名、党員候補・シンパ約1,000名がいて、コミンテルンのモンゴル・チベット支部やハルハ・モンゴルでも活動していることなどを指摘している⁽¹²⁾。

このようにザバイカル州では、自己に有利な農耕地の確保をめざす農民と、特権的に保証されてきた土地を手放したくないカザーク、先祖伝来の遊牧地の返還を求めるブリヤート・モンゴル人の3者の対立が、ソヴィエト政権の前に立ちはだかっていた⁽¹³⁾。ここには、生活様式・民族文化の相違に基づく、農耕民と遊牧民との土地問題そのものに対する大きな認識の相違が存在し、それが問題の解決を一層複雑にしていたのである。

ザバイカル州の東部ブリヤートと比べて、イルクーツク県の西部ブリヤートでボルシェヴィズムの浸透が比較的早かったのは、ロシア化の進展とほぼ比例するものであった。ただ

しボルシェヴィズムの浸透は主として都市の労働者住民と農村の勤労農耕民に限定されていた。

2. ブリヤートにおける内戦と汎モンゴル主義運動

1918年2月23日から28日まで第2回全シベリア労農兵カザーク・ソヴィエト大会がイルクーツクで開催された。ポリシェヴィキ22名、左派エスエル9名、アナキスト2名からなる新ツェントロ・シビエリを選出し、その議長シュミヤツキーがシベリア・ソヴィエト共和国人民委員会議長を兼務した。軍事人民委員ラゾーの指揮下に対セミョーノフのザバイカル戦線強化をめざした⁽¹⁾。

自称アタマン（頭目）・セミョーノフ（1882-1946年）は、1917年秋にザバイカル・ブリヤート人騎兵部隊を編成し、1918年11月頃から日本軍の支援を受けて汎モンゴル主義運動を起こし、1919年2月25日にチタで「大モンゴル国」建国会議を開催した。

内モンゴルから1名、デュルベトから2名、ジャライトから3名、バルガから3名、ブリヤートからアギンスクのサンピロン（ブリヤート民族委員会議長）、ツガリスクのドゥイロフ、バルグジンのリンチノ、セレンギンスクのビンバエフ、プリクトスクのヴァムヴィロン、ホリのツィドゥイポフら6名がこの会議に参加し、内モンゴルのネイセ・ゲゲン⁽²⁾を首班とする臨時政府をダウリアに樹立した。日本軍部からは鈴江大尉が出席し、その首席顧問にセミョーノフが就任した⁽³⁾。外務大臣にブリヤートのジャムツァラーノを欠席のまま任命し、財務大臣を不参加のハルハに割り当てるなど、モンゴル諸族代表政府の体裁をとっていた。

ハルハ・モンゴルでは、ボグド・ハーンが1918年8月4日に外モンゴル王公会議を召集し、セミョーノフの勧誘を拒否することに決した。これはハルハが運動の主導権を内モンゴルやブリヤートに握られるのを嫌ったためであろう⁽⁴⁾。さらに外モンゴル王公・上層ラマの中には、中国の保護下に入ろうとする動きさえ現れた。

一方では、拒絶されたセミョーノフがハルハに対して進攻すると威嚇した。他方では、日中軍事共同防敵軍事協定を締結した北京政府が、このセミョーノフの脅威を利用して、外モンゴルの「自治取消」をはかろうとした。1919年10月末に庫倫に到着した西北籌邊使兼西北邊防総司令の徐樹錚は、反対者を軍事力で弾圧して自治取消請願を上奏させ、1920年1月に自治撤回儀式を挙行了た。

「大モンゴル国」外務大臣に予定されたジャムツァラーノがこれに参加しなかったのは、以下のような彼の経歴を見れば理解できるであろう。ジャムツァラーノらブリヤート・インテリゲンツィアの経歴には興味深いものがある⁽⁵⁾。

ツィヴェン・ジャムツァラーノヴィチ・ジャムツァラーノは、アギンスク・アイマクに生まれ、1902年イルクーツク師範学校卒業、1903-06年ブリヤート、ハルハ調査旅行、07-08年サンクト・ペテルブルク大学モンゴル語講師、09-10年内モンゴル旅行、11年オノン河上流のツングース族調査、12年コトヴィチ探検隊とエルデニ・ズーの調査に参加、12-17年庫倫で『首都庫倫新聞』『新しい鏡という名の新聞』など発行、19-20年イルクーツク大学教授、21年3月モンゴル人民党第1次綱領草案執筆、21年7月モンゴル科学委員会設立、26

年バドマジャブ・セデノヴナと結婚、北京訪問、26-32年ウランバートルで科学委員会に従事、32年レニングラードへ追放、ロシア科学アカデミーで活動、37年8月レニングラードで逮捕、以後消息不明、40年？獄死、という経歴を持つ。

モンゴル側の情報によれば、モンゴル名をジャムスランギーン・ツェヴェーンといい、1921年モンゴル人民党入党、コミンテルン第3回大会モンゴル代表、21-28年内務省副大臣、23-25年党中央委員、25-28年党中央統制委員会議長、24-25年国民大会幹部会員、党内「右翼偏向」に積極的に関与したために28年の第7回党大会で党指導部から排除された⁽⁶⁾。

彼は「外蒙自治」を取り決めた1914年9月-1915年6月の「キャフタ三国会議」にモンゴル側の翻訳官として参加しており、田中克彦氏が指摘するように、彼がモンゴル諸族の統一国家建設を志向していたことは間違いない。その彼が「大モンゴル国」外務大臣への誘いを拒否した理由は「ロシアとそれを介した西欧文明の優位とその解放思想についてのゆるぎない自覚があったから」であろう⁽⁷⁾。

特権身分のカザークは一般に保守反動的だと見なされているが、実際にはカザーク内部でも階層分化が進んでいて、ロシア革命に対しても賛否両論があった。セミョーノフによって動員されたブリヤート・カザークは、1917年4月の第1回ザバイカル・カザーク大会のカザーク解散決議に賛成して脱カザーク化しており、その多数派はセミョーノフらの運動に対して冷淡であった⁽⁸⁾。その中には、ランジュロフのように、コムニストになった者もいた⁽⁹⁾。

セミョーノフの「大モンゴル国」はハルハの不参加、ジャムツァラーノらブリヤート内部での不支持の外に、日本側がコルチャック政権との関係でセミョーノフ援助を一方的に打ち切ったこと⁽¹⁰⁾や、1919年夏の内モンゴル・カラチン族の反乱、1920年初めのネイセ・ゲゲンの反ロシア人蜂起などのために内部分裂を起こしてまもなく解体してしまった⁽¹¹⁾。

セミョーノフの脅威と徐樹錚らの「外蒙自治取消」の動きの中で、民族の統一と独立を志向する進歩的人々が庫倫在住ロシア革命家たちの仲介で集まって、1920年6月にモンゴル革命家会議が開かれ、7人の革命家代表がソヴィエト・ロシア及び極東共和国に援助を求めて派遣される。さらに1921年2月のバロン・ウンゲルンによるハルハ・モンゴル侵攻で、シベリア内戦がモンゴルに波及する。

このシベリア内戦のモンゴルへの波及とともに、ブリヤート・モンゴル解放運動がハルハ・モンゴル解放運動と直接結び付いて、「汎モンゴル主義」運動の様相を帯びてくる。同じモンゴル人である両者の間には大国ロシアと中国によって一方的に引かれた国境しかなかったのであるから、これは当然の成り行きといえるであろう。

II. ブリヤート人のソヴィエト化

1. 西部ブリヤート人における共産党組織の建設

1918年夏以降、チェコ軍団の蜂起と日米軍を主力とする「シベリア出兵」のために、イルクーツク以東の各地ではソヴィエト政権が崩壊し、ツェントロ・シベリと各ソヴィエト機関が引き上げを余儀なくされて、革命勢力は弱体化した。このため地下活動グループの建設から共産党組織の再建が始まった。

1919年初めにイルクーツクでブリヤート・コムニスト地下グループがA. マルキエフ、C. ニコラエフ、Γ. ダンチノフ、M. H. エルバノフらによって形成され、エルバノフと II. B. スルノフが西部ブリヤート部に派遣された。同年5月のイルクーツク市地下活動家会議で共産党イルクーツク市委員会が創設された⁽¹⁾。

1919年夏に共産党アラリ委員会が生まれ、A. O. ナザロフ、II. B. バハノフらが参加した。8月にチェレムホヴォ鉱山労働者の間でΦ. II. パブロフが指導するボリシェヴィキ組織が創設された。同月にはコンドイでも B. II. トゥルバチェエフの指導で党細胞が組織され、Φ. II. パブロフ、C. X. ニコラエフらが参加した。12月30日には共産党コンドイ委員会も創設された⁽²⁾。

1919年秋に共産党ボハン委員会がΦ. M. オソドエヴァ指導下に活動を開始し、II. C. バルタヒノフを隊長とするブリヤート・パルチザン部隊が創設された。12月22日にボハン・ホショーで革命政権が樹立され、ボハン執行委員会に II. C. バルタノフ、Γ. T. パブロフら6名が選ばれた。12月にはレンスク・ホショーとモリキ・ホショー、さらにエリヒトブラガト・アイマクでも軍事革命委員会が設立されている。このエリヒトブラガト・アイマク軍事革命委員会を指導したのは著名なパルチザンの H. A. カランダリシヴィリであった⁽³⁾。

11月にイルクーツクでブリヤート・コムニスト・グループの全体集会が開催され、党イルクーツク組織にブリヤート部創設の提案がなされ、その組織委員会委員に M. H. エルバノフ、Γ. Γ. ダンチノフが選出された⁽⁴⁾。これを受けて2月25日にイルクーツク県革命委員会が党イルクーツク県委員会ブリヤート部創設を決議した⁽⁵⁾。

1920年1月15日に成立したアンガラ・アイマク革命委員会は、C. X. ニコラエフ、Φ. II. パブロフ、II. C. アルヒンチェエフ、B. II. トゥルバチェエフら6名が参加し、ソヴィエト綱領に基づく呼びかけ「アンガラ・アイマク住民へ」を発表した⁽⁶⁾。

同じ1月15日にアラリ・アイマク革命委員会も成立し、A. O. ナザロフ、Γ. B. ウダノフの指導するソヴィエト政権を樹立、パルチザン部隊「チェレムホヴォ労働者」がこれに合流した⁽⁷⁾。

翌1月16日にエリヒトブラガト・アイマクのホショー代表者総会でエリヒトブラガト・アイマク革命委員会を選出したが、A. ミハイロフ、ピチャハノフら地方自治体・ナショナリスト・エスエル・資本家・クラークの抵抗を受けた。このためエリヒトブラガト・アイマクに対してアラリ・アイマクの A. II. オシロフ、II. A. イリインらが派遣された。

2月末にはトゥンキン・アイマクに対してもアンガラ・アイマクの K. C. イリイン、H. M. バルダエフらが派遣され、3月6日のトゥンキン・アイマク勤労住民代表大会でトゥンキン・アイマク革命委員会が選出されている⁽⁸⁾。

1月23-26日にチェレムホヴォでブリヤート・コムニスト協議会が開かれ、共産党ブリヤート部委員会（委員 M. H. エルバノフ、Γ. Γ. トゥルバチェエフ、C. X. ニコラエフ、委員候補 Γ. Γ. ダンチノフ、A. A. マルキゾフ）が選出された⁽⁹⁾。

2月1日の共産党第1回イルクーツク県協議会は、新しい党県委員会を選出し、2月4日に「諸地区と民族支部について」討議した。2月15日のアンガラ・アイマク革命委員会では B. II. トゥルバチェエフが「バラガン郡革命委員会の活動の誤り」について報告を行った⁽¹⁰⁾。

この「誤り」の具体的内容は明らかにされていないが、恐らく「民族主義的誤り」であったのは間違いないであろう。

1920年初め頃の共産党イルクーツク県委員会の「ブリヤート・モンゴル問題」に対する態度は、2月24日の党ブリヤート部委員会の決議に示されている。その決議は「イルクーツク県ブリヤート住民の勤労・被搾取大衆がいかなる形態でも民族自治を必要としていない」とするものであった⁽¹¹⁾。

4月にイルクーツク県革命委員会代表者大会が開催され、党イルクーツク県委員会書記で県革命委員会議長の Я. Д. ヤンソンが指導権を握った。この大会では、エルバノフが「ソヴィエト政権と農村」について報告を行っている⁽¹²⁾。

4月28日には共産主義青年同盟第1回イルクーツク県代表者会議が開かれ、代議員78名が出席した。すでにアラリ、ボハン、トゥンキン各アイマクではコムソモールが組織されていて、大会当時の同盟員数は約2,500名に達していた⁽¹³⁾。

4-5月には西部ブリヤート部の諸アイマクで「共産主義時間外無給労働運動」が展開され、また同年に組織された党イルクーツク県委員会婦人部が、ブリヤート婦人運動を支援した⁽¹⁴⁾。

6月初め頃、セレンギンスク・アイマクで党組織の活動が活発化しつつあった。同アイマクでは「ロシア語を知る者がごく僅かで、高等教育を受けた医者もゼロのような状態」であったが、すでにアンガラ・アイマクから E. И. ロソフ、И. В. チェンキロフが派遣されて組織活動に従事していた⁽¹⁵⁾。

6月に党イルクーツク県書記大会が開催され、シャフマトフが県婦人部の活動について報告を行った。同6月に B. M. タラントエヴァの指導で、M. B. サガダロヴァを長とする県婦人部ブリヤート局が設置された⁽¹⁶⁾。

党イルクーツク県委員会は、7月13日にブリヤート部長 Г. Г. ダンチノフが諸アイマクでの党活動が不十分だと指摘したのを受けて、諸アイマクでの階級闘争推進を決議した。8月6日には県ブリヤート・コムニスト組織の調査問題を討議し、8月13日に再び諸アイマク問題について決議を行った。この問題については9月2日-7日のイルクーツク県郡・アイマク・地区革命委員会代表者会議で若干の総括がなされた⁽¹⁷⁾。

こうして西部ブリヤート部では、1920年秋までにアイマク統治機関のソヴィエト化がほぼ完了し、11月のソヴィエト選挙カンパニア、12月の諸アイマク・ソヴィエト大会を経て、翌1921年1月イルクーツク県第1回ソヴィエト大会の開催に至るのである。

2. 西部ブリヤート部におけるソヴィエト政権の樹立

イルクーツク県第1回ソヴィエト大会の前に、2つの県ブリヤート人大会が、即ち9月16日のイルクーツク県ブリヤート・コムニスト大会と10月17日-26日のイルクーツク県非党員ブリヤート大会が開催されている。

ブリヤート・コムニストは、1920年10月初めに150名（当時のイルクーツク県ブリヤート住民は約140,000人）であったが、21年2月4日に236名、同年3月1日に427名へとこの間急速に増大した。2月4日から3月1日への増加数をみると、アンガラ・アイマクで党員60

名が112名へ、党員候補が72名のまま、計132名から184名へ、エヒリトブリガト・アイマクで党員15名が44名へ、党員候補11名が23名へ、計26名から67名へ、トゥンキン・アイマクで党員17名のまま、党員候補2名が121名へ、計19名から138名へ、その他2月4日現在未登記の者55名、3月1日統計でセレンギンスク・アイマクで党員8名、イルクーツクで30名となっている⁽¹⁾。

これらの数字は、イルクーツク県のブリヤート・コムニストが特にアンガラ・アイマクに集中していることを示している。これは、その「主な活動地域が最もロシア化されたアンガラ・アイマクである」というリンチノの指摘を具体的に裏づけるものである⁽²⁾。

ブリヤート・コムニストが1921年3月1日統計でたったの8名に過ぎないセレンギンスク・アイマクでは党委員会が機能しておらず、3月2日にセレンギンスク・アイマクへコムニスト12名を派遣することが検討された。1920年から21年初めにかけて、セレンギンスク・アイマク以外に、エヒリトブラガト・アイマクやトゥンキン・アイマク、極東共和国諸地区などへも、アンガラ・アイマク、特にアラリ・ホショーから党・ソヴィエト活動家が派遣されている⁽³⁾。

10月17日から26日まで開かれたイルクーツク県非党員ブリヤート大会には、代議員250名中、211名が出席した。その内訳は、アンガラ・アイマク23名、エヒリトブラガト・アイマク67名、セレンギンスク・アイマク38名、その他83名であった⁽⁴⁾。

大会議長 M. H. エルバノフがブリヤート人兵役問題や土地問題について、B. II. トルバチェエフがブリヤート民族独立問題について報告した。この時、民族派のツィレンジャポフがブリヤート・ナショナリストを公然と擁護したのに対して、トルバチェエフはナショナリストが特権保持を願って外国干涉軍と協定していると指摘しただけでなく、民族自治に反対の態度を表明した。また党中央委員会シベリア局東方諸民族部モンゴル・チベット課ダギヴィロフの報告を受けて、大会は東方諸民族の解放闘争、モンゴル・チベット民族との連帯、「極東諸民族大会」の早期実現を決議した⁽⁵⁾。

大会最終日の10月26日に、党イルクーツク委員会は、モスクワの Я. M. スヴェルドロフ名称共産主義大学へブリヤート・コムニスト2名（C. X. ニコラエフ、M. E. アタノフ）とイルクーツク、チェレムホヴォ出身者各3名、バラガンスク、セレンギンスク出身者各1名を派遣することを決定している⁽⁶⁾。

11月から12月初めにかけてイルクーツク県ではソヴィエト選挙カンパニアが展開された。11月13日にイルクーツク県革命委員会は、ソヴィエト大会開催期限を、郡部（ロシア人居住地区）では11月26日から12月1日まで、アイマク部（ブリヤート人居住地区）では12月1日までと決定した⁽⁷⁾。

12月初めにアンガラ・アイマク第1回ソヴィエト大会が開催された。代議員には、ウギンスク・ホショー代表 B. B. バハノフ、アラリ・ホショー代表 A. O. ナザロフ、Φ. II. パヴロフ、ビリチルスク・ホショー代表 M. II. アマガエフ、ボハン・ホショー代表 Φ. ハルタエフ、カヒンスク・ホショー代表 II. パブロフらが含まれていた。大会では食糧・原料調達問題、地方革命委員会の活動問題などが討議され、アンガラ・アイマク執行委員会が創設された。その委員には M. A. アマガエフ、B. A. トルバチェエフ、B. B. バハノフ、Д. M. イ

ヴァノフら15名が選出されたが、その党派別内訳は、コムニスト10名、非黨員3名、左派エスエル1名、アナキスト1名となっていた⁽⁸⁾。

同じ12月初めにトゥンキン・アイマク第1回ソヴィエト大会も開催されている。大会では、マフロフスキーがアイマク革命委員会について報告を行い、ブリヤート住民のソヴェト政権に対する思想教育問題や食糧配給実施問題などを討議した。創設されたトゥンキン・アイマク執行委員会には、H. M. バルダエフ、K. П. クシェノフ、Д. B. ハブハエフら10名が選出されたが、彼らは全員コムニストであった⁽⁹⁾。

12月1日の開催期限をかなり遅れて、12月17日ようやくセレンギンスク・アイマク第1回ソヴィエト大会が開催された。E. И. ロソル、H. シャンタノフら15名の委員が選出されたセレンギンスク・アイマク執行委員会では、コムニストがたった2名だけであった⁽¹⁰⁾。

12月21日にはエヒリトブリガト・アイマク第1回ソヴィエト大会が開催されたが、これは、B. A. トルバチェエフが12月12日から10日間かかって党細胞会議を指導して、ようやく開催にこぎつけたものであった。創設されたエヒリトブリガト・アイマク執行委員会は、委員15名中、コムニスト及びシンパが9名、非黨員が6名であった⁽¹¹⁾。

1921年1月にイルクーツク県第1回ソヴィエト大会が開催され、ここにおいてようやくイルクーツク県全体が党・ソヴィエトの政権下に入った。出席した代議員98名の内、コムニストが91名を占めていた⁽¹²⁾。

1920年10月初め頃にナショナリストによって提起された「文化的民族的自治」思想をも含めて、すでに上述したように、「いかなる形態でも民族自治を必要としていない」観点から、こうして西部ブリヤートは、「民族自治」否定方針によって東部ブリヤートやハルハ・モンゴルなどから分離された形で、ロシア共産党の強力な指導の下にソヴィエト化が強行されたのである。

Ⅲ. 東部ブリヤートにおける極東共和国の成立

1. 東部ブリヤートにおける緩衝国家の建設

1919年12月19日に西ザバイカルのムホルシビルスコエ村で農民が蜂起し、これを援助するためにパルチザン部隊が進駐した。その後12月21日にタルバガタイスカヤ郷で、12月末にマレチンスカヤ郷で反セミョーノフの蜂起が続発した⁽¹⁾。

すでに西シベリアでは、8月27日の全ロシア中央執行委員会の決議によりシベリア革命委員会が組織され、19年秋からパルチザン部隊を主とする革命派の反抗が開始されつつあった。11月14日にはコルチャック軍が撃破されてオムスクが解放された。コルチャック政権は首相にカデットの B. H. ペペリャエフを任命して内閣改造を行い、12月22日に全権をデニーキン将軍に委譲、翌23日にはアタマン・セミョーノフをイルクーツク・ザバイカル・プリバイカル軍管区総司令官に任命した⁽²⁾。

12月後半からチェレムホヴォ、ニジネウディンスク、トゥルン、ジマなどの諸都市ではパルチザン蜂起の準備が進行していた。12月24日にイルクーツクで蜂起が起こり、第53シベリア歩兵連隊が行動を開始して、30日夜に A. ボイコフや Д. シュミャツキー、クラスノシヨー

コフら約2,000名の政治囚を解放した⁽³⁾。

このイルクーツク蜂起を指導したのはボルシェヴィキではなく、11月の全シベリア地方自治体・都市協議会で設立されたメンシェヴィキ、エスエルの「政治センター」であった。蜂起のイニシアチヴがボルシェヴィキ側になかったことは、蜂起開始の翌日12月25日夕方になって初めて党シベリア委員会・党イルクーツク県委員会・軍司令部合同会議が行われたこと、さらにイルクーツク県党活動家会議が勤労大衆の蜂起への動員をめざす決議をようやく1月2日になって行なったことから明らかである⁽⁴⁾。

1920年1月8日にプリバイカル軍事革命本部が創設され、25日にはヴェルフネウディンスクでプリバイカル解放地区第1回ソヴィエト大会が開催された。大会には代議員が122名出席し、西部ザバイカル全パルチザン部隊司令官に E. B. レベデフが任命された。

この大会の後、3月に設立されたプリバイカル臨時地方自治政権はメンシェヴィキ・エスエル10名とボリシェヴィキ5名から成り、プリバイカル中央執行委員会から3名、ヴェルフネウディンスク郡地方自治機関から4名、ブリヤート住民から1名（ゴトゥイ・ツィレン・ガルマエフ）が参加した。政府議長はメンシェヴィキの И. Пятчищачников、副議長はボリシェヴィキの H. Помとエスエルの A. Механшинで、行政部長ボリシェヴィキ B. Мариков、同代理メンシェヴィキ E. Рощин、軍事部長ボリシェヴィキ H. К. Гончаров、同代理エスエル P. Куценжеспорскийであった。この政府は「プチ・ブル政党、労働組合、ブリヤート住民から成る連立政権」で、「緩衝国家」の端緒であった⁽⁵⁾。

同じ頃、沿海州では、1月26日にニコリスク・ウスリースクで蜂起が起こり、29日にはウラジオストックが解放された。31日に沿海州臨時連立政府が樹立され、C. ラゾー、B. シビルツェフらコムニストが軍事ソヴィエトを指導し、П. М. Никифоровが財政経済ソヴィエトの長に就任した。2月5日ブラゴヴェシチェンスク、16日ハバロフスク、3月2日ヴェルフネウディンスク、3日全アムール州が解放された。これに伴い、3月3日には共産党中央委員会シベリア局から極東局が分離されて、クラスノシチョーコフ、ゴンチャロフ、ラゾー、ニキフォロフらがそれに参加した⁽⁶⁾。

プリバイカル臨時地方自治政権の成立後、3月28日から4月8日までプリバイカル勤労住民大会が開催され、代議員380名が参加した。この時ブリヤート住民代表は、規定では代議員数104名であるにもかかわらず、実際の代議員数は23名に過ぎず、このためにブリヤート勤労住民の意思を表明することができないと抗議した⁽⁷⁾。

大会では、ソヴィエト政府代表 A. M. Класношчорковや人民革命軍代表ゴンチャロフ、プリバイカル・パルチザン司令官レベデフ、イルクーツク県委員会代表ガラニン、全ブリヤート民族革命委員会その他の社会団体代表が祝辞を述べた。

大会は「極東共和国宣言」を決議し、「極東共和国臨時政府」を選出した。政府委員にはクラスノシチョーコフ、Ф. Н. Петров、E. Ф. Савуриeff、Г. Т. Петров、A. И. Бринников、Д. К. Сморинら25名が就任した。この政府は、農民10名、労働者2名、ブリヤート2名、カザーク1名、軍人1名、エスデ・エスエル・ボリシェヴィキ計6名、ザバイカル・ゼムストヴォ3名から成る「人民革命政権」であった⁽⁸⁾。また「極東共和国人民革命軍」が創設され、軍事ソヴィエト委員に Г. X. Эйхе、H. К. Гончаров、A. A. Ширья

モフが、総司令官にはエイヘが任命された⁽⁹⁾。

大会では II. H. ダンピノフらエスエル、メンシェヴィキ、ナショナリストとコムニストが対立したが、コムニストが多数派を占め、「狭隘な民族主義」に対して「国際主義」が勝利したとされる。

ハプタエフは、ブリヤート自治、特にアイマク問題に関する対立について次のように述べている。ロシア人住民代表の大多数が、政治機構の完全な統合と中央集権化を必要不可欠とみなし、アイマク統治機関の存在がブリヤート・ブルジョアジーに扉を開くもので、ブリヤート勤労者の利益を擁護することができないとした。これに対してブリヤート住民代表は、ブリヤート人の自治の許与と郡行政単位としてのアイマクの保持を要求した。代議員の中で特にパルチザン運動指導者は、ブリヤート民族ドゥーマがセミョーフ軍を支持して民族部隊を組織しダウリア士官学校へ若者を派遣したとして、アイマクとブリヤート自治に対して否定的態度を取った。ブリヤート活動家にはボリシェヴィキも、熱心なナショナリストも、多数のエスエルもいたが、それらを区別しないで、全ブリヤート人に対してブルジョア・ナショナリズムの悪評を投げつけた。そのためにダンピノフらが抗議文を提出したこと、ボリシェヴィキのアノソフの発言が代議員の中で遊離していたこと、またブリヤート住民がパルチザン部隊に馬や運搬賦役を提供してきたことなどを挙げている⁽¹⁰⁾。

これに対してデミドフは、ハプタエフには「国際主義」と「民族主義」の闘争という視点が欠けている、「もしハプタエフの考察に従えば、民族自決の一貫した闘士であったのがナショナリストであるということになる」ので誤りだ、アノソフが遊離していた根拠はない、多数の代議員は階級的、国際主義的立場を堅持したとする⁽¹¹⁾。

「緩衝国家」と民主政府の創設問題については、エスエル、メンシェヴィキの「政治センター」がすでに1月3日のコルチャック政府との交渉の席上で提案していたが、これに対してシベリア革命委員会も1月19日コルチャック政府との交渉を開始する中で「緩衝国家」案を承認していた。両者の争点は、エスエル、メンシェヴィキ主導の「ブルジョア民主主義」政府創設か、それともボリシェヴィキ主導の「プロレタリア民主主義」政府創設か、とされた。

この大会で「緩衝国家」形成の理由を報告したクラスノシチョーフは、この時両者の仲裁役を務めた。彼はメンシェヴィキやエスエルを説得して政府に参加させたとして、ボリシェヴィキの側から非難されてきた⁽¹²⁾。しかし当時の困難な情勢下で極東共和国が「緩衝国家」としての使命を達成するためにクラスノシチョーフが果たした役割を一面的に非難することには大きな疑問が残る⁽¹³⁾。

4月に入ると日本軍によるウラジオストックやチタの革命軍攻撃が激化した。これに対して4月24日に極東共和国人民革命軍による反攻が開始され、4月29日には極東共和国と日本の休戦交渉が一応妥結した。その後5月末のゴンゴッタ駅での交渉を経て、6月15日にザバイカル戦線での休戦協定が成立した⁽¹⁴⁾。こうしてザバイカル戦線の膠着と「緩衝国家」の成立の過程で、「ブリヤート・モンゴル問題」が一層クローズアップされてくるのである。

2. ブリヤート民族革命委員会の結成

1920年3月17日にセレンギンスク、ホリ、バルグジン・アイマク住民代表大会が、ヴェルフネウディンスクで開催されている。この大会には ㊦. Д. リンチノ、エスエル党地区委員会議長 П. Н. ダンピノフ、П. А. アルサハノフ、Б. ツィレンジャポフ、Б. ヴァンピルン、И. Д. ダンピノフなどが参加し、エスエル、ナショナリストの指導下で、臨時全ブリヤート民族機関としてブリヤート民族革命委員会が創設された。ブリヤート民族革命委員会は、ザバイカル・ブリヤート民族運動の指導、地方での革命委員会の組織、ブリヤート人大会の召集を目的とし⁽¹⁾、ブリヤート住民への呼びかけで、日本及びアタマン・セミョーノフと結んだサンピロン、リンチノらを正当化しようとしたとされている⁽²⁾。

リンチノとはどんな人物であったのかを理解するために、彼の経歴を見ておこう。モンゴル名をリンチンギーン・エルベグドルジといい、1888年北バイカルのバルグジン・ホショー生れ、1906-07年ロシア社会民主労働党员、17年からエスエル党员、21年からモンゴル人民革命党员、30年から全連邦共産党员、16年5-12月外モンゴル調査、20年夏ロシア共産党シベリア局極東民族部モンゴル・チベット課で活動、21年3-5月コミンテルン極東書記局モンゴル・チベット支部長、21年4月-1925年10月モンゴル人民政府顧問、人民義勇軍養成所長、軍事ソヴィエト議長、21-25年軍事ソヴィエト議長、経済会議委員、22-25年党中央委員・同議長、24-25年国民大会幹部会員、25年9月-26年10月赤色教授研究所聴講生、27年10月-37年6月東方勤労者共産主義大学講師、助教授、教授、22年ロシア赤旗勲章受賞、31年モンゴル人民共和国軍事勲章受賞、37年死去という経歴を持つ人物である⁽³⁾。

彼は1919年にセミョーノフの「汎モンゴル主義運動」に関与し、ブリヤート自治のためには日本及びセミョーノフ軍との関係確立を必要と考えたこともあった⁽⁴⁾が、1920年夏にソヴィエト・ロシアに援助を請いに行った7名のモンゴル革命家代表団（ボドー、チャクドルジャブ、ロソル、チョイバルサン、ダンザン、ドクソム、スヘバートル）を助けて活動した人物でもある⁽⁵⁾。1924年8月のモンゴル人民党第3回大会では、援助した代表団の一人で党委員長のダンザンを資本主義路線を採ったとして弾劾する報告を行っている⁽⁶⁾。彼はこのように次第にコムニズムへ傾斜していった人物である。

1920年5月に党プリバイカル州委員会党ブリヤート部が創設された⁽⁷⁾が、これは1919年11月の党イルクーツク県委員会ブリヤート部創設に遅れること約半年で、東部ブリヤートシアにおけるポリシェヴィキ勢力の実態がわかるであろう。

5月24日から6月3日までセレンギンスク、ホリ、バルグジン・アイマク・ブリヤート自治体活動家代表大会が開催された。大会は自治組織としてのホショー・アイマク制保持が「ブリヤート人の自由な存在」の条件だと宣言して⁽⁸⁾、行政・経済の完全な崩壊、人民大衆の零落、モンゴルへの大量亡命、人心・財産の安全保証の欠如を指摘し、民族統治機関の承認を要求、これを「歴史的に」正当化しようとした、とされる。ところがその大会に出席していたコムニストの С. X. ニコラエフ、Б. Н. トルバチェエフらは、「諸般の事情で」全く発言できなかったという⁽⁹⁾。

3月17日の住民大会と5月24日からの自治体代表者大会の両方に参加したセレンギンスク・アイマクは、党イルクーツク県委員会の指導下にあったが、既述したように、1921年3月1

日現在で共産党がたった8名で、党セレンギンスク・アイマク委員会は機能しておらず、党の影響力がほとんど浸透していなかった地区である。

1920年夏にはエスエルの指導によって「シベリア農民同盟」がオムスクで組織され、オムスク、チュメニ、アルタイ各県のすべての郡で地方機関を持っていた⁽¹⁰⁾。また8月にはウラジオストック臨時政府首相ビナシクが、セミョーフ軍下で「極東諸州合同政府」の創設を検討していたといわれる⁽¹¹⁾。

10月半ばに日本軍がザバイカルから撤退し、10月22日にはチタが解放された。それで10月28日から11月11日までチタで諸州政府合同会議が開催された。大会にはアムール州、ウラジオストック州、サハリン州、カムチャッカ州から代表が参加し、極東共和国臨時新政府が選出された。その新政府委員にはクラスノシチョーフ、マトヴェエフ、ニキフォロフ、ペトロフ、ルミヤンツェフらが任命された。

ブリヤート民族革命委員会はリンチノ、II. H. ダンピノフらをこの大会に派遣し、エスエル、メンシェヴィキらと結んで、極東共和国からの分離独立を要求した。これに対してクラスノシチョーフは領土の統一性を主張して、ダンピノフらに反対した。その結果、大会で多数派を占めた共産党派が、ついにメンシェヴィキ、エスエルを極東共和国政府から排除するに至った⁽¹²⁾。

11月22日から28日までチタで共産党第1回極東地区協議会が開催された。この席上 A. A. ズナメンスキーは「極東における党の任務」報告で、極東共和国の樹立があくまでソヴィエト・ロシアの国際情勢によってやむなく採用された政策であることを強調した。またクラスノシチョーフは「極東共和国憲法制定会議選挙準備について」報告し、党と革命的労農同盟の強化を訴えた⁽¹³⁾。

この間、11月半ばにブリヤート革命委員会がチタに移転している。12月9日から12日までザバイカル州アイマク・ホショー代表者会議がチタで開催された。その議題はブリヤート・モンゴル自治問題草案作成専門家が参加する「アルヒーフ特別委員会」をキジンギンスク（ホドゥンスク）・ダツェンに創設する問題であった⁽¹⁴⁾。ボルシェヴィキ側は、これをナショナリストの策動と見なしていた。

12月24日にはブリヤート革命委員会の定期刊行物『ブリヤート・モンゴルの声』第1号が発行されている。1921年1月24日に発行された第2号では、法制史研究者 B. Я. リャザノフスキーの『ブリヤート慣習法』第2部からの抜粋や、極東共和国政府批判の論文「ブリヤート・モンゴルと少数民族の統治問題について」が掲載された。特に後者は、極東共和国政府による「異民族問題省」とブリヤート行政統治制度の創設に対して疑問を呈したものであった⁽¹⁵⁾。

IV. ブリヤートにおける自治州の創設

1. 極東共和国ブリヤート・モンゴル自治州の成立

1921年1月9日から11日にかけて極東共和国憲法制定会議代議員選挙が実施された。その選挙結果は当選者総数 382名で、党派別内訳は、共産党92名 24.0%、農民多数派（貧

農・中農) 183名 47.9%、農民少数派 (エスエル影響下の富農) 44名 11.5%、ブリヤート13名 3.4%、メンシェヴィキ14名 3.7%、エスエル18名 4.7%、民族社会主義者3名 0.8%、シベリア・エスエル6名 1.6%、非党員民主主義者8名 2.1%、党外1名 0.3%であった⁽¹⁾。注目すべきは、ボルシェヴィキを示すコムニストが92名 24.0%にすぎず、また農民多数派が必ずしもコムニスト・シンパとは言えない点である。

このような選挙結果を受けて、1月17日に極東共和国政府は、アイマク執行委員会、ホショー執行委員会をブリヤート自治統治機関として正式に承認した。さらに21日のブリヤート問題に関する極東共和国政府とブリヤート革命委員会の合同拡大会議は、ブリヤート自治州創設を必要と承認した⁽²⁾。2月13日にブリヤート自治実現準備委員会が創設され、B. II. トルバチェフ、A. II. オシロフ、M. E. アタノフが委員に任命された⁽³⁾。

2月12日から4月27日までチタで極東共和国憲法制定会議が開催された。エスエル、メンシェヴィキは、旧ブリヤート民族委員会・旧ブリヤート民族ドゥーマの指導者を含むブリヤート・フラクションを支持した。それは民族的特殊性と境界分割による民族自治の合法化とロシア住民の強制的分離によるブリヤート領の管区化などを主張した。これに対してコムニスト・フラクションは、西欧型のブルジョア民主主義国家に変えようとするエスエル、メンシェヴィキの主張を断固拒否したとされる⁽⁴⁾。

長期にわたって開催された大会は、4月26日に極東共和国憲法を採択し、極東共和国政府を選出して4月27日に閉幕した。憲法には第5部第2章に「ブリヤート・モンゴル民族の自治」(第116条から第120条まで)が明記された⁽⁵⁾。

また極東共和国政府委員には、議長クラスノシチョーフ、副議長マトヴェエフ、委員 II. II. クラルク、II. B. スリンキン、II. C. シロフ、非党員の B. C. ボンダレンコ、M. II. ボロディンが選出された。閣僚会議には、首相 Ф. M. ニキフォロフ、副首相兼保健大臣 Ф. H. ペトロフ、軍事大臣兼人民革命軍総司令官 Б. K. ブリュッヘル、外務大臣 II. A. ユーリン、その他に内務・農業・郵政・貿易・国家管理の各大臣と最高裁長官にコムニストが、産業・財務の各大臣にメンシェヴィキのアニシモフ、ピナシクが、法務大臣にエスエルの E. トルップが、文部大臣にシレイデルが選出されている⁽⁶⁾。

4月19日には、ブリヤート・ナショナリスト、エスエルらによるブリヤート自治機関代表大会が開かれ、アギンスク、ホリ、バルグジン、チコイスク各アイマクから代表者が参加した。ブリヤート民族革命委員会議長 II. H. ダンビノフが大会報告を行ない、郡統治機関としてのアイマクの承認、極東ブリヤート中央機関としてのブリヤート民族革命委員会承認などを提起した。

大会は、『ブリヤート・モンゴルの声』やリャザノフスキー、セレブレニコフの著書、M. H. ボグダノフ全集の出版計画、1921年7月までにブリヤート・モンゴル民族代表大会を開催することを決議した。臨時ブリヤート州統治機関幹部会を創設し、議長 II. H. ダンビノフ、委員 Я. III. ショイヴァノフ、B. 3. ドゥイルギロフを選出した⁽⁷⁾。ここに自治州が事実上成立した。

この臨時ブリヤート州統治機関幹部会は、5月初めに「ブリヤート民族に対する呼びかけ」を行ない、5月17日には7月1日に民族大会開催の許可を求める提案を極東共和国政府に行っ

た。5月27日には、6月25日選挙、7月5日極東共和国ブリヤート自治州創立大会開催の日程を決議した⁽⁸⁾。これに対して7月27日に極東共和国政府は、アギンスク、バルグジン、ホリ、チコイスクの4アイマクから成る自治州の領域を設定して、臨時ブリヤート州統治機関幹部会に自治州代表者会議召集を許可している⁽⁹⁾。

結局7月中に自治州創立大会開催は実現しなかったが、7月28日の臨時ブリヤート州統治機関幹部会に、共産党ブリヤート部から派遣されたM. И. アマガエフとФ. И. パプロフが出席して、自分たちを幹部会に入れるように要求した。「完全な政治的孤立を恐れた」エセル、メンシェヴィキは翌29日にこの要求を承諾した⁽¹⁰⁾。

1920-21年の極東共和国でブリヤート自治州創設運動が高揚し具体的な進展がみられたのは、東部ブリヤートとモンゴルにおける内戦の進展状況に相応するものといえよう。というのは、20年10月日本軍のザバイカル撤退、21年2月ウンゲルンのモンゴル占領、3月モンゴル臨時人民政府樹立、4-5月「神政運動」活発化、ウラジオストック、沿海州で反革命蜂起、5-6月ウンゲルンのブリヤート侵攻、7月11日庫倫解放、8月21日「大連会議」開始という政治情勢の変化が大きな意味を持ったからである⁽¹¹⁾。

1921年4-5月に東部ブリヤートで活発化した「神政運動」というのは、モンゴル民族の統一を意図したラマ教国家建設をめざす「汎ラマ教運動」であった。その起源は、1918-19年に「オラン・ツァグダー（赤色民警）」動員に反対してブリヤート民族委員会とブリヤート民族ドゥーマが行った抗議の特別形態にあり、19年4-5月初めにホリ・アイマクのボドングトとツァガンスク・ホショーで広まったが、5月10日夜にサンダン・ツィデノフが逮捕されて一時衰退した。その後21年4月17日にアリガイ・エビルの運動指導者バト・ジャムサラノフの家で会合がもたれ、4-5月に「神政運動」が再び活発化した。極東共和国政府はД. С. シロフ特別委員会を設置してこれを取り締まった結果、「神政運動」は再び停滞した。8月16日にД. С. シロフ特別委員会は「神政運動」をクラーク、ラマ、ノヨンの戦術的策動だと総括した⁽¹²⁾。このような宗教問題、民族問題に対する階級闘争観からの一面的総括には、「ブリヤート・モンゴル問題」解決の多難さが示されている。

紆余曲折の後、1921年10月12日から11月3日まで極東共和国ブリヤート自治州第1回民族大会がチタで開催され、ブリヤート自治州が正式に成立するに至った。

極東共和国副議長H. M. マトヴェエフらが出席したこの大会は、「極東諸民族の接近と結束」を提唱し、幹部会にコムニストのアマガエフ、K. С. プレシュコフ、非黨員リンチノを選出した。この幹部会メンバーは1922年11月14日の自治州社会代表者大会まで変更されない。また大会は、極東共和国政府の作成した「ブリヤート・モンゴル自治州統治法」を審議し、これを承認した。この大会では共産党を支持する「左派フラクション」が結成された⁽¹³⁾。

ここに成立した極東共和国ブリヤート自治州の統治範囲は、アギンスク（31,270人）、バルグジン（16,703人）、ホリ（50,521人）、チコイスク（17,262人）の4アイマク（115,757人）であった⁽¹⁴⁾。

2. ロシア連邦共和国ブリヤート・モンゴル自治州の成立

1921年1月にイルクーツク県執行委員会に民族問題局が創設され、ユダヤ人、タタール人、

ポーランド人、ブリヤート人の各課とレット人部が設置された⁽¹⁾。

1月29日の党イルクーツク県委員会ブリヤート部拡大会議では、全ロシア第8回ソヴィエト大会から戻ったM. N. エルバノフの報告を受け、また東シベリア・ブリヤート・モンゴル中央委員会創設を決議し、その委員にエルバノフとアマガエフを、委員候補にトルバチェエフを選出した。

党ブリヤート・フラクションは、1921年7月初めまで「西欧型のブルジョア民主主義体制」をめざすエスエル、メンシェヴィキを支持した。これに対してナショナリストは「ロシア・極東共和国から完全に分離独立したブルジョア自治政府」創設を主張していた⁽²⁾。

2月にオムスクでシベリア諸民族代表全シベリア協議会が開催され、ブリヤート、ヤクート、キルギス、アルタイから代表が参加した。同じ2月に西部シベリア（アルタイ、エニセイ、トムスク、チュメニ県）でクラーク、エスエル指導の蜂起が計画され、イルクーツクで創設されたクラーク、エスエルの軍事政治センター「ロシア再生組織本部」にブリヤート・クラーク B. ホロドフらが参加した⁽³⁾。

こうした動きに目を奪われた党イルクーツク県委員会幹部会は、ブルジョアジーや似而非コムニストとの闘争を重視して、ブリヤート自治問題を軽視した。同幹部会は、2月21日にブリヤート・モンゴル自治形態問題解決資料収集処理委員会を創設したが、民族自治に対しては否定的態度を保持したままであった⁽⁴⁾。これはロシア共産党第10回大会が「新経済政策」への移行と同時に大国主義的ショービニズムと地方ブルジョア的民族主義への偏向の危険を警告した政策に相応するものである。

しかし東シベリアにおける干渉と内戦の困難な情勢を打開するために政治的判断から、極東共和国ブリヤート自治州創設だけでなくロシア連邦共和国ブリヤート自治州創設も積極的に推進したのは、むしろ党中央委員会政治局の方であった。

1920年夏に党中央委員会シベリア局少数民族課の指導により、シベリア革命委員会に14の民族部が創設されたが、そこにはブリヤート部や全モンゴル課も含まれていた⁽⁵⁾。同年7-8月コミンテルン第2回大会、9月バクーで第1回東方諸民族大会が開催された⁽⁶⁾。カルムイク、モンゴル、ブリヤートなどの代表が参加した10月14日の党中央委員会政治局会議は、モンゴル人に反中国ナショナリズムを警告して非抑圧者の団結を訴え、ブルジョアジーや似而非コムニストとの闘争を主要任務とする一方で、ブリヤートとカルムイクの自治を支持し、極東共和国ブリヤート自治州創設要請決議もなされた。翌年2月28日に党中央委員会シベリア局は、4アイマクから成るロシア連邦共和国ブリヤート自治州創設を決議した⁽⁷⁾。

5月末に民族人民委員部にブリヤート代表部を設置、部長に I. C. アルヒンチェエフが任命された。さらに6月前半に党中央委員会は、「ブリヤート勤労住民への特別呼びかけ」を採択し、「行政的領土的民族自治」を約束した⁽⁸⁾。

7月6日の党イルクーツク県委員会ブリヤート部会議には、アラリ・アイマク書記 B. II. トルバチェエフ、トゥンキン・アイマク書記 II. B. ハブハエフ、エヒリトブラガト・アイマク書記エゴロフ、コミンテルン極東書記局モンゴル・チベット部書記Γ. ダンチノフらが参加し、アマガエフが極東共和国ブリヤート自治州情勢と党組織の任務について報告、極東共和国ブリヤート自治州にトルバチェエフとイリインを、極東共和国政府にアマガエフを派

遣することを決定した。その理由は「無学なブリヤート住民の下では民族主義諸党派が指導権を握るのは危険である」というものであった⁽⁹⁾。

7月26日の党イルクーツク県ブリヤート部会議で、6月26日の党中央委員会極東局のブリヤート共和国創設反対決議について討議した。会議はロシア連邦共和国と極東共和国の両自治州の統合とブリヤート自治共和国形成を必要と認めて、党中央委員会極東局の誤った決議を批判し、コミンテルン全権代表シュミヤツキーを通じて党中央委員会に通告したが、極東局はこれを全く無視した⁽¹⁰⁾。

9月2日にエルバノフ、トルバチェエフ、アマガエフらが出席して開かれた東部シベリア・ブリヤート・モンゴル中央委員会は、ブリヤート自治州創立大会召集とブリヤート革命委員会創設を承認した。この東部シベリア・ブリヤート・モンゴル中央委員会は4月25日にエルバノフ議長、アマガエフ副議長で発足したものである⁽¹¹⁾。

9月19日に党ブリヤート部会議では、コムニストとナショナリストの間で激論が交わされた。ナショナリストのダシ・サンピロンは「政治的中立方針」、政党間の闘争にブリヤート人は積極的に干渉すべきでないとし、「極東共和国ブリヤート自治法」の大会提出を提案した。これに対してコムニストのC. X. ニコラエフは、民族抑圧は階級闘争の結果であり、民族問題はプロレタリアートの利益に従属するものであると主張した⁽¹²⁾。

10月6日に党ブリヤート部は、ブリヤート革命委員会にエルバノフ、サハルトゥエフ、マフロフスキー、ツィレンジャポフ、ウブグノの推薦を決定した⁽¹³⁾。10月11日に14名から成る左派フラクションが形成されたが、ブリヤート・モンゴル自治機関幹部会議長ニキフォロフはこれに反対している。また党ブリヤート部はロシア連邦共和国ブリヤート自治州創立大会に間に合うように極東共和国ブリヤート自治州創立大会を10月25日までに終了するように指令した⁽¹⁴⁾。

こうして10月28日から11月5日までロシア連邦共和国ブリヤート自治州創立大会がイルクーツクで開催された。代議員は187名で、党籍分類では、党員30名、党員候補6名、非党員151名で、社会的地位では、労働者5名、教師6名、農民176名、教育レベルでは、中学卒31名、小学卒13名、独学者128名、無学歴者15名であった⁽¹⁵⁾。祝辞を述べたのは、コミンテルン極東書記局ミンケル、党イルクーツク県委員会シュミヤツキー、極東共和国ブリヤート・モンゴル民族委員会サトバエフ、イルクーツク大学ブシュマキン教授、赤軍第5軍革命軍事ソヴィエトのシュムリン、イルクーツク市労働者兵士ソヴィエトのパクリン、革命青年同盟ノヴォセロフ、婦人部スヴェルチコヴァ、党ブリヤート部トルバチェエフ、ハルハ・モンゴルのブリヤート婦人・留学青年らであった。

大会の焦眉の問題は、極東共和国ブリヤート・モンゴル人とモンゴル諸族との関係であった。東シベリア・ブリヤート・モンゴル中央委員会代表エルバノフは、両自治州の全ブリヤート・モンゴル人統治機関としてブリヤート・モンゴル中央委員会創設に賛成した。また極東共和国ブリヤート自治機関代表アマガエフは、ロシア連邦共和国ブリヤート・モンゴルとの協力によってのみ経済危機と文化的後進性の克服が可能であると表明した⁽¹⁶⁾。さらに全ブリヤートの統合を支持する書簡を発表したモンゴル人民党中央委員会代表代理は、ハルハの新生活建設で両ブリヤート自治州に文化的援助を要請し、ハルハとの文化的民族的統合問題を

検討するように提案した。

両ブリヤート・モンゴル自治州統合問題と「根幹的モンゴル人」(ハルハ・モンゴル人)との関係問題で、次の決議が行われた⁽¹⁷⁾。

1)ロシア連邦共和国及び極東共和国のブリヤート・モンゴル人と根幹的モンゴル人との文化的民族的統合が絶対必要と承認する。

2)東シベリア・ブリヤート・モンゴル中央委員会が、全モンゴルの文化的民族的統合問題解決のために、a)ロシア連邦共和国ブリヤート・モンゴル、b)極東共和国ブリヤート・モンゴル、B)ハルハ・モンゴル、の代表から成る協議会の期限付き召集について、モンゴル人民革命党中央委員会と協定することを必要と承認する。

大会はブリヤート自治州革命委員会にエルバノフ議長、ウブグノフ、サハルトゥエフ、マフロフスキー、ゴムボエフの5名を選出して閉幕した。この委員会は党員3名、非党員2名の構成で、1922年12月6日のブリヤート自治州第1回ソヴィエト大会まで活動した⁽¹⁸⁾。

1922年1月9日の全ロシア中央執行委員会令で、5アイマクから成るロシア連邦共和国ブリヤート・モンゴル自治州が正式に成立した。1月25日にシベリア革命委員会が示した境界線によると、面積101,677平方ベルスタ、人口185,192名で、その内ブリヤート人は約129,000名、約70%を占めていた。またイルクーツク県に留まることになったブリヤート人が18,346名もいた⁽¹⁹⁾。

州人口の残りの約30%はロシア人住民であった。これに対して、民族的住民構成以外に経済的統一性や文化的合目的性も重視して、政治経済文化の中心地として特にロシア人の住む都市部を自治州に含めた、自治州にロシア人住民を含めることでロシア人労働者によるブリヤート農民の指導とクラーク、ノヨン、ラマからブリヤート勤労大衆を保護できる、などの説明が共産党側からなされた⁽²⁰⁾。

しかしこのような論理の裏側にロシア共産党によるロシア人住民の既得権の擁護と少数民族の自決権に対する制限が隠蔽されているのを感じたブリヤート・モンゴル人の側から、境界問題がその後何度も提起されることになるのである。

おわりに

1920年4月アメリカ軍撤退後も駐留を続けた日本軍も、1921年7月のウンゲルン軍粉碎とモンゴル解放、8月からの「大連会議」を経て、1921年末から22年初めにはシベリア干渉戦争と内戦が事実上の終結を迎えた。

シベリア内戦の中で1920年4月にロシア連邦共和国から独立した「緩衝国家」極東共和国に含まれた東部ブリヤートでは、ブリヤート民族革命委員会が比較的自由に活動できたために、民族自治運動が活発に展開され、極東共和国ブリヤート・モンゴル自治州が比較的早く創設されることになった。

また1920年夏にモンゴル人民党代表チョイバルサン、ダンザンらが、極東共和国でシュミヤツキーらと会見すると同時に、ジャムツァラーノ、リンチノらブリヤート民族革命委員会とも接触して、ハルハ・ブリヤートの革命的連帯が次第に緊密になっていった。

それに対してロシア化された都市部を中心に共産党の強力な指導下におかれた西部ブリヤートでは、党の指導が「民族自治」を否定する傾向にあり、ブリヤート・モンゴル民族自治運動がブンドの「文化的民族的自治」理論に依拠するもので、ブルジョア・ナショナリスト、メンシェヴィキ、エスエルの策動とみなされた。

例えば、ブリヤート民族革命委員会の B. ツィビコフが「文化的民族的自治」を主張したこと、極東共和国の民族問題省長官と副長官にメンシェヴィキの K. Я. ルクス、Я. Я. ペトロヴィチが任命されたこと、極東共和国憲法の民族自決項目作成にメンシェヴィキの И. アフマトフ、ピナシクやエスエルのトルップ、ストロジェフが関与したことが指摘されてきた⁽¹⁾。

さらに「無学なブリヤート住民のもとでは民族主義諸党派が指導権を握るのは危険である」として、都市部のブリヤート人党員を各アイマクに派遣してアイマク革命委員会を組織させ、1920年末には各アイマク・ソヴィエト大会を開催した。

ところが、極東共和国ブリヤート・モンゴル自治州やハルハ・モンゴルにおける民族解放闘争の進展を受けて、すでに見たように、早くも1921年10-11月のロシア連邦共和国ブリヤート自治州創立大会で、両ブリヤート自治州の統合問題、さらには「根幹的モンゴル人」たるハルハ・モンゴルとの統合問題が提起されたのである。

両ブリヤート自治州の統合問題は、例えば、党中央委員会極東局による両自治州統合反対論と、同民族人民委員部による両自治州統合及びソヴィエト自治共和国形成承認論に分かれた。

1922年12月末にアマガエフが党中央委員会極東局で、ロシア住民がブリヤート住民の良い土地を占有して、ブリヤート住民が不便な土地に追いやられていると報告したところ、極東局は農耕経済への移行期に発生した問題であり、ブリヤート人はロシア人勤労農民のために自分たちの土地を公平に譲渡しなければならない、ブリヤート人の中での公平な土地分配こそが問題なのである、とされた⁽²⁾。

1923年3月5日の党中央委員会極東局会議でアマガエフが両自治州統合案を報告した際、43%を占めるロシア人住民が統合に反対しているとして、マトヴェエフ、A. ブイコが反対意見を表明した。特に議長ブイコは、統合が行政的合目的性を欠き現実的に不可能であり、また人口・領土に関する資料が不十分で、ブリヤート・ロシア住民関係の正確な調査が不可欠だとして反対、結局統合慎重論が支配し、とりあえず調査特別委員会を設置することを決定した⁽³⁾。

両ブリヤート・モンゴル自治州統合問題やハルハ・モンゴルとの統合問題は、若きソヴィエト政権に多くの問題を投げかけながら、やがて1923年12月にロシア連邦共和国内でのブリヤート・モンゴル自治共和国の創立という形で妥協が成立することになる。この問題はモンゴル人民共和国やトヴァ人民共和国の形成問題とも密接に関係するはずであり、ここでは論じる余裕がない。ブリヤート・モンゴル自治共和国の形成過程の検討は、別稿に譲ることにしたい。

— 注 —

[はじめに]

- 1 *Первая всеобщая перепись населения*, т. LXXIV, стр. 64-67, 121; т. LXXV, стр. 60-63, 115. (原暉之「シベリアにおける民族的諸関係—南シベリア遊牧民地帯を中心に—」『史苑』第42巻第1・2号、立教大学史学会、1982年5月、所引。)
- 2 Ш. Б. Чимитдоржиев, *Кто мы бурят-монголы?* [Улан-Удэ], 1991, стр. 57-58.
- 3 1926年の調査では、ブリヤート人47.9%、ロシア人49.5%、その他51民族2.6%であった。*Сибирская советская энциклопедия*, т. I, Новосибирск, 1929, стр. 411.
- 4 Э. М. Шагин, *Октябрьская революция в деревне восточных окраин России (1917- лето 1918 гг.)*, М., 1974, стр. 330. (藤本和貴夫『ソヴェト国家形成期の研究 1917—1921』、ミネルヴァ書房、1987年2月、231頁、所引。) なおブリヤート・カザークの起源については、クドリヤフツエフ著、蒙古研究所訳『ブリヤート蒙古民族史』、紀元社、1943年、155—157頁参照。
- 5 Э. М. Шагин, Указ. соч., стр. 34. (藤本和貴夫、前掲書、232頁、所引。)
- 6 1920年5月のセレンギンスク、ホリ、バルグジン各アイマク自治体活動家代表大会は、ブリヤート・モンゴル人民が零落してハルハ・モンゴルへ大量亡命している状況を指摘した。Н. Д. Шулунов, *Становление советской национальной государственности в Бурятии (1919-1923 годы)*, Улан-Удэ, 1972, стр. 264.
- 7 Э. Д. Ринчино, “Бурят-монголы Восточной Сибири,” *Жизнь национальностей*, 1921, no. 11(109).
- 8 内戦期の「ブリヤート・モンゴル問題」に関する主な研究書に、*История Бурятской АССР*, т. II, Улан-Удэ, 1959; П. Т. Хаптаев, *Октябрьская революция и гражданская война в Бурятии*, ч. III, Улан-Удэ, 1967; Г. Л. Санжиев, *В. И. Ленин и национально-государственное строительство в Сибири (1917-1937 г. г.)*, Улан-Удэ, 1971; Н. Д. Шулунов, *Становление советской национальной государственности в Бурятии (1919-1923 годы)*, Улан-Удэ, 1972; В. А. Демидов, *Октябрь и национальный вопрос в Сибири 1917-1923 гг.*, Новосибирск, 1978, Издание второе дополненное, 1983 などがある。

[I - 1]

- 1 原暉之「シベリア・極東における十月革命」『スラヴ研究』24号、1979年、100—101頁。
- 2 *История Бурято-Монгольской АССР*, т. II, Улан-Удэ, 1959, стр. 27-28.
- 3 *История Сибири с древнейших времен до наших дней*, т. III, Л., стр. 493.
- 4 *История Бурято-Монгольской АССР*, т. II, стр. 38-39. 「ブリヤート民族委員会」の詳細な実態については、今後さらに検討を要する。
- 5 В. А. Демидов, *Октябрь и национальный вопрос в Сибири 1917-1923 гг.*, Новосибирск, 1983, стр. 190. 「ブリヤート民族ドゥーマ」は、1918年11月のヴェル

フネウディンスク大会で「ブリヤート民族委員会」が改称されたもの。 *История Бурято-Монгольской АССР*, т. II, стр. 81.

- 6 Л. Е. Берлин, “Бурят-монгольский вопрос,” *Жизнь национальностей*, 1921, но. 12 (147).
- 7 *История Сибири с древнейших времен до наших дней*, т. IV, Л., стр. 60.
- 8 Н. Д. Шулунов, *Указ. соч.*, стр. 35. М. М. Сахьяновъについては Robert A. Rupen, *Mongols of the Twentieth Century*, Bloomington, 1964, p.150, n.26. 参照。
- 9 *Революция и национальный вопрос*, т. 3, М., 1930, стр. 396-397. (原暉之「シベリア・極東における十月革命」、122頁、所引。)
- 10 И. Евсенин, “Автономная Бурятия и буряты Нижнеудинского уезда,” *Жизнь национальностей*, 1922, но.1 (7).
- 11 「ホショー (旗)」、「アイマク (部)」は、清朝時代において確立されたモンゴルの行政単位で、「部」は「旗」で構成され、「旗」は「ソム (索木)」で構成された。「ソム」には、公共牧地の利用・軍の編成・戸口調査・アルバ (賦役) の負担など政治経済的共同体としての側面があった。清朝の設置した「旗」の組織や機能には土地と時期により相違があり、「従来の封建組織を利用しその上に清朝の国家的統制を及ぼし、封建と王政との均衡を保つように努められた」と考えられる。田山茂『清代に於ける蒙古の社会制度』文京書院、昭和28年、111-113、141頁。

清朝が利用したモンゴル本来の組織「ホショー」の起源について、ウラジミルツォフは次のように考えている。モンゴル帝国とともに崩壊した「千戸」が、明朝時代には社会経済単位で「オトク」と呼ばれ、軍事単位で「ホシグウ」と呼ばれていた。やがてこれらが混用されて、15世紀以降には「ホシグウ」＝「ホショー」が政治経済単位と化した。Б. Я. Владимирцов, *Общественный строй монголов*, Ленинград, 1934. 参照。

モンゴル支配層を形成した「ノヨン (王公貴族)」は、チンギス・ハンの子孫及びその家臣の系統に属し、親王・郡王・貝勒・貝子・公・台吉などの爵位を有した。

И. Майский, *Современная Монголия*, Иркутск, 1921. 『支那の制度より見たる蒙古』(満鉄東亜経済調査局、昭和4年) など参照。

清朝の統治下に入らなかったブリヤート・モンゴルにおいて「ホショー・アイマク制」が二月革命後に敢えて設置されるに至った最大の理由は、単なる復古主義ではなくて、革命の混乱で存亡の危機を迎えたブリヤート・モンゴル民族が、その政治経済的共同体を再編強化することによって民族防衛をめざした点にあったと考えられる。

- 12 И. Архинчеев, “Бурят-монголы и Октябрьская революция,” *Жизнь национальностей*, 1921, но. 24 (122).
- 13 В. Соколов, “Октябрь за Байкалом,” *Пролетарская революция*, М., 1922, но. 10, стр. 391.

[II - 2]

- 1 原暉之「シベリア・極東における十月革命」、122-123頁。
- 2 ネイセ・ゲゲン・メンドバヤルは、トゥメト・モンゴル人で、自らの威信を高めるために称号「ジョライ・ボグド」を名のった。*History of the Mongolian People's Republic*, Translated from the Mongolian and annotated by William A. Brown and Urgunge Onon, Cambridge and London, 1976, p.748, n.39.
- 3 А. Ф. С-кий, “Материалы к истории интервенции,” *Новый Восток* но. 2, 1922, стр. 593. 日本軍部の対セミョーノフ工作は、高橋治『派兵』第1-4巻（朝日新聞社、1972-1977年）に詳しい。
- 4 磯野富士子『モンゴル革命』（中央公論社、1974年）、95頁。
- 5 Robert A. Rupen, “Cyben Zamcaranovic Zamcarano (1880-1940),” *Harvard Journal of Asiatic Studies*, Vol.19, 1956. ; “The Buriat Intelligentsia,” *Far Eastern Quarterly*, Vol.15, No.3. 1956.
- 6 *Монгол Ардын Намын гуравдугаар их хурал*（モンゴル人民党第3回大会）、1966 он, 264 талд.
- 7 Э. Д. Ринчино, “Бурят-монголы Восточной Сибири,” *Жизнь Национальностей*, 1921, Но.11 (109).
- 8 田中克彦『草原の革命家たち 増補改訂版』（中央公論社、1990年）、35-36、202-203頁。
- 9 Robert A. Rupen, *How Mongolia Is Really Ruled*, Stanford, Cal., 1979, p.154 - 155, n.6.
- 10 細谷千博『ロシア革命と日本』原書房、1972年、第3章参照。
- 11 I. J. Korostovetz, *Von Cinggis Khan zur Sowjetrepublik*, Berlin und Leipzig, 1926, S.294 - 295. 高山洋吉訳『蒙古近世史』森北書店、1943年、473-474頁。

[II - 1]

- 1 Н.Д.Шулунов, *Указ. соч.*, стр.41.
- 2 *Там же*, стр.44 - 45, 48.
- 3 *Там же*, стр.53 - 55.
- 4 *Там же*, стр.44 - 45.
- 5 В.А.Демидов, *Указ. соч.*, стр.224.
- 6 Н.Д.Шулунов, *Указ. соч.*, стр.50 - 51.
- 7 *Там же*, стр.53.
- 8 *Там же*, стр.56 - 58.
- 9 *Там же*, стр.65.
- 10 *Там же*, стр.66 - 67.
- 11 *Там же*, стр.107. N.D. シュルノフは、ブリヤート・コムニスト全員が民族自治に反対したわけではないと弁解している。
- 12 *Там же*, стр.68 - 69.

- 13 Там же, стр. 92.
- 14 Там же, стр. 92 - 93.
- 15 Там же, стр. 59.
- 16 Там же, стр. 93.
- 17 Там же, стр. 71 - 75.

[II - 2]

- 1 Н. Д. Шулунов, *Указ. соч.*, стр. 89 - 90.
- 2 Э. Д. Ринчино, "Бурят-монголы Восточной Сибири," *Жизнь национальностей*, 1921, но. 12 (110).
- 3 Н. Д. Шулунов, *Указ. соч.*, стр. 91.
- 4 Там же, стр. 109.
- 5 Там же, стр. 111 - 114.
- 6 Там же, стр. 91.
- 7 Там же, стр. 76.
- 8 Там же, стр. 78, 93 - 94.
- 9 Там же, стр. 78, 94.
- 10 Там же, стр. 79, 94.
- 11 Там же, стр. 90, 94.
- 12 Там же, стр. 79.

[III - 1]

- 1 Н. Д. Шулунов, *Указ. соч.*, стр. 233.
- 2 Там же, стр. 27.
- 3 Там же, стр. 28 - 29.
- 4 Там же, стр. 22, 30.
- 5 П. Т. Хаптаев, *Указ. соч.*, стр. 194.
- 6 Н. Д. Шулунов, *Указ. соч.*, стр. 234 - 239.
- 7 П. Т. Хаптаев, *Указ. соч.*, стр. 202. シュルノフは、西部ザバイカル・ブリヤート人18名を含む代議員405名が参加したとする。Н. Д. Шулунов, *Указ. соч.*, стр. 240.
- 8 П. Т. Хаптаев, *Указ. соч.*, стр. 204.
- 9 В. А. Демидов, *Указ. соч.*, стр. 229.
- 10 П. Т. Хаптаев, *Указ. соч.*, стр. 207 - 208.
- 11 В. А. Демидов, *Указ. соч.*, стр. 230.
- 12 Там же, стр. 229.
- 13 原暉之「クラスノシチョークと極東共和国」、原暉之・藤本和貴夫編著『危機の＜社会主義＞ソ連』（社会評論社、1991年）参照。
- 14 Н. Д. Шулунов, *Указ. соч.*, стр. 246.

[III - 2]

- 1 П. Т. Хаптаев, *Указ. соч.*, стр. 203.

- 2 Н. Д. Шулунов, *Указ. соч.*, стр. 261 - 263.
- 3 Х. Чойбалсан, Д. Лосол, Дэмид, *Монгол ардын үндэсний хувьсгалын анх үүсэж байгуулагдсан товч түүх* (モンゴル人民の民族革命の発端と成就の略史), Улаанбаатар, 1979 он, 289 талд. 初版は1934年発行。
- 4 Б. Д. Цибиков, *Разгром Унгерновщины*, Улан-Удэ, 1947, стр. 53 - 54. ; Robert Rupen, *How Mongolia Is Really Ruled*, pp. 25, 161, n.7.
- 5 *Монгол Ардын Намын гуравдугаар их хурал*, 264 талд. 265頁。なおモンゴル革命家代表7名の運命については、田中克彦『草原の革命家たち 増補改訂版』終章参照。
- 6 1924年8月26日にダンザン弾劾の報告がなされた。*Монгол Ардын Намын гуравдугаар их хурал*, 156 - 179 талд. Дунザンは、自己の地位を利用して、国民の利益に敵対して国内の資本主義的要素や外国資本の利益にそって活発に動いていたといわれる。小貫雅男『モンゴル現代史』、山川出版社、1993年、200—202頁。
- 7 Н. Д. Шулунов, *Указ. соч.*, стр. 275.
- 8 В. А. Демидов, *Указ. соч.*, стр. 231.
- 9 Н. Д. Шулунов, *Указ. соч.*, стр. 265.
- 10 М. Богданов, *Разгром западно-сибирского кулацко-эсеровского мятежа в 1921 г.*, стр. 15. ; Н. Д. Шулунов, *Указ. соч.*, стр. 81.
- 11 *Дальистпарт. Сб. материалов революционного движения на Дальнем Востоке*, кн. 1, Владивосток, стр. 253. ; Н. Д. Шулунов, *Указ. соч.*, стр. 246.
- 12 В. А. Демидов, *Указ. соч.*, стр. 231, 234. ; Н. Д. Шулунов, *Указ. соч.*, стр. 249.
- 13 Н. Д. Шулунов, *Указ. соч.*, стр. 251 - 253.
- 14 *Там же*, стр. 267.
- 15 *Там же*, стр. 267 - 268.

[IV - 1]

- 1 *Октябрьская революция и гражданская война на Дальнем Востоке*, М., стр. 219. ; Н. Д. Шулунов, *Указ. соч.*, стр. 258.
- 2 *Там же*, стр. 268 - 269.
- 3 *Там же*, стр. 125.
- 4 В. А. Демидов, *Указ. соч.*, стр. 239. ; Н. Д. Шулунов, *Указ. соч.*, стр. 258 - 259.
- 5 *Основной закон (конституция) Дальне-Восточной Республики*, Чита, 1921, стр. 26 - 27 ; “В Дальне-Восточной Республике,” *Жизнь национальностей*, 1921, no. 27 (125).
- 6 Н. Д. Шулунов, *Указ. соч.*, стр. 259 - 260.
- 7 *Там же*, стр. 272. Демидовは議長が Г. Ц. Тывиковで、Дунビノフを委員とする。
В. А. Демидов, *Указ. соч.*, стр. 241 - 242.
- 8 Н. Д. Шулунов, *Указ. соч.*, стр. 273 - 274.

- 9 Л. Е. Берлин, “Бурят-монгольский вопрос.”
- 10 Н. Д. Шулунов, *Указ. соч.*, стр. 279.
- 11 磯野富士子氏は、ソヴィエト側がモンゴル介入に至る経過を、クラスノシチョークとシュミヤツキーの対立などを含めて検討している。磯野富士子「モンゴル革命に対するソビエト・ロシアの軍事介入について」『東洋学報』第62巻第3・4号、1981年3月。
- 12 Н. Д. Шулунов, *Указ. соч.*, стр. 291 - 293.
- 13 В. А. Демидов, *Указ. соч.*, стр. 244. ; Н. Д. Шулунов, *Указ. соч.*, стр. 282.
- 14 Н. Д. Шулунов, *Указ. соч.*, стр. 325.

[IV-2]

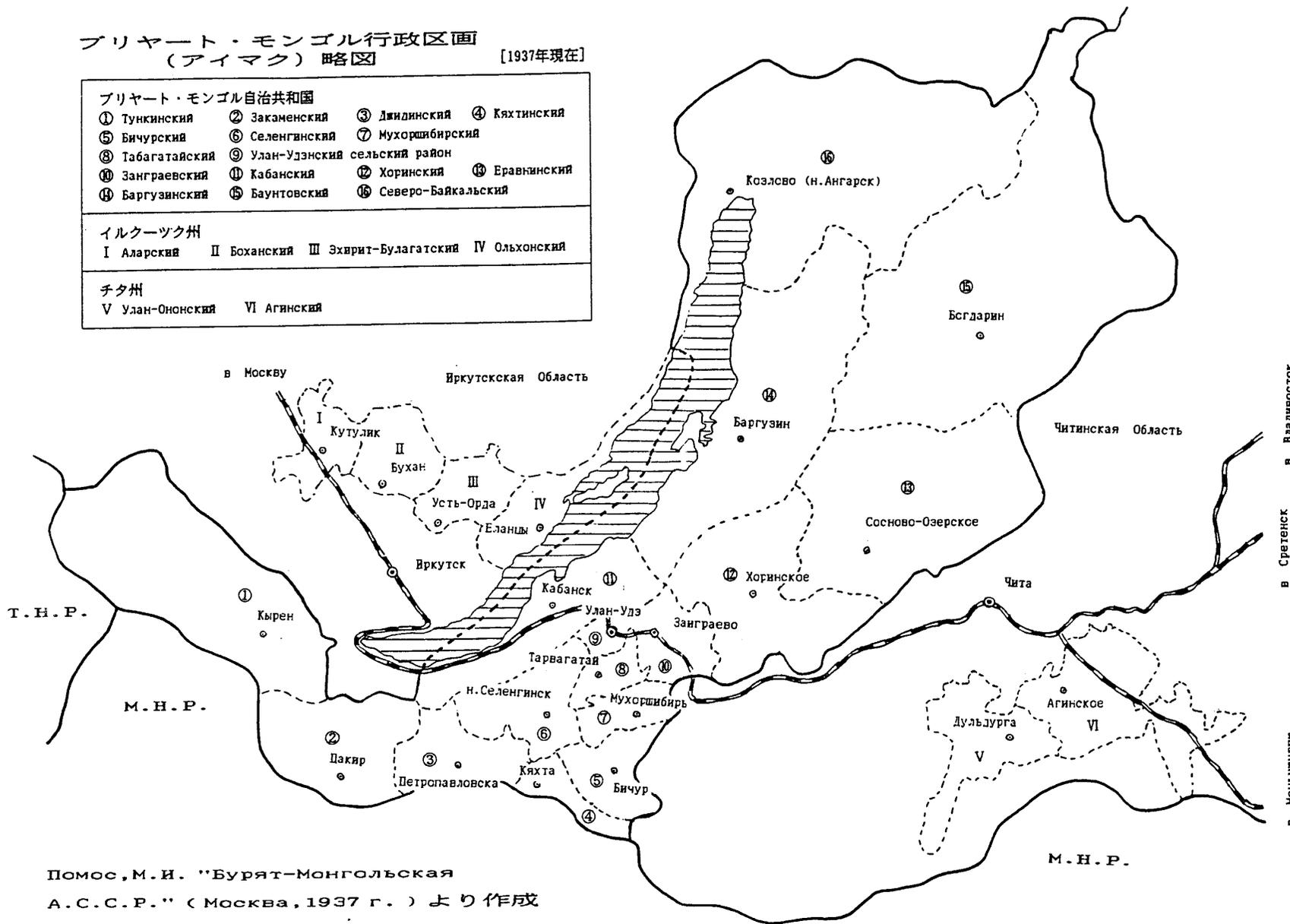
- 1 Н. Д. Шулунов, *Указ. соч.*, стр. 64.
- 2 *Там же*, стр. 269.
- 3 *Там же*, стр. 63, 81 - 83.
- 4 *Там же*, стр. 119 - 120.
- 5 *Там же*, стр. 62.
- 6 伊藤秀一「バクーの東方諸民族大会について」『紀要』、神戸大学文学部、第1号、1971年、161-192頁参照。
- 7 Н. Д. Шулунов, стр. 117 - 118, 120. Allen. S. Whiting, *Soviet Politics in China. 1917 - 1924*, New York, 1954, pp. 81 - 82.
- 8 Н. Д. Шулунов, стр. 126, 122 - 123.
- 9 *Там же*, стр. 276 - 277. ; В. А. Демидов, *Указ. соч.*, стр. 243.
- 10 *Там же*, стр. 236. ; Н. Д. Шулунов, *Указ. соч.*, стр. 278.
- 11 Н. Д. Шулунов, *Указ. соч.*, стр. 121 - 122.
- 12 *Там же*, стр. 88, 101 - 102.
- 13 *Там же*, стр. 280.
- 14 *Там же*, стр. 281.
- 15 “Монголия,” *Народы Дальнего Востока*, 1921, но. 5, Иркутск, 1921. Шулрnofは代議員200名で187名出席、Демидовは代議員219名とする。 Н. Д. Шулунов, *Указ. соч.*, стр. 134. ; В. А. Демидов, *Указ. соч.*, стр. 237.
- 16 Н. Д. Шулунов, *Указ. соч.*, стр. 134 - 136.
- 17 “Монголия,” *Народы Дальнего Востока*, 1921, но. 5.
- 18 Н. Д. Шулунов, *Указ. соч.*, стр. 172.
- 19 *Там же*, стр. 164 - 165.
- 20 *Там же*, стр. 155, 158.

[おわりに]

- 1 Н. Д. Шулунов, *Указ. соч.*, стр. 286 - 287.
- 2 *Там же*, стр. 332 - 333.
- 3 *Там же*, стр. 401 - 403.

ブリヤート・モンゴル行政区画
(アイマク) 各図 [1937年現在]

ブリヤート・モンゴル自治共和国			
① Тункинский	② Закаменский	③ Двиндинский	④ Кяхтинский
⑤ Бичурский	⑥ Селенгинский	⑦ Мухоршибирский	
⑧ Табагатайский	⑨ Улан-Удэнский сельский район		
⑩ Занграевский	⑪ Кабанский	⑫ Хоринский	⑬ Еравнинский
⑭ Баргузинский	⑮ Баунтовский	⑯ Северо-Байкальский	
イルクーツク州			
I Аларский	II Боханский	III Эхирит-Булагатский	IV Ольхонский
チタ州			
V Улан-Ононский	VI Агинский		



Помос, М. И. "Бурят-Монгольская
А.С.С.Р." (Москва, 1937 г.) より作成

The Russian Civil War in Siberia and the Buryat-Mongolian Problem

Masanori IKOMA

On the eve of the Russian Revolution, while the Western Buryats of Irkutsk Guberniya had made a remarkable progress in Russification and were engaged in agriculture, most of the Eastern Buryats of Transbaikal Oblast' remained nomads. Especially in Eastern Buryatiya there were sharp conflicts of interests in land problem between farmers and nomads. When the Russian Revolution broke out, the Buryats had no hostility and were indifferent to it. There was a great difference in perception of the land problem due to the differences in the way of life and the ethnic culture between Russian farmers and Buryat-Mongolian nomads, which made the solution of the Buryat-Mongolian problem difficult.

Buriat nationalists, such as Sampilon and Rinchino, attended the Conference for founding "the Pan-Mongolian State" which Ataman Semenov held at Chita in February 1919. This "state" was soon collapsed owing to the objection of the Khalkhas, the absence of Jamtsarano, the discontinuance of Japanese aid and the rebellion of the Inner Mongolians. The Peking government revoked "the Outer Mongolian Autonomy" in January 1920. The Khalkha-Mongolian revolutionaries held the meeting and sent their seven representatives to Soviet Russia for help in June 1920. Ungern-Sternberg occupied Urga in February 1921 and the Russian Civil War spread over into Khalkha - Mongolia, which combined the Buryats and the Khalkhas for their liberation.

In Western Buryatiya, after the summer of 1919 the Aimag Committees of the Communist Party were organized one after another. In January 1920 the Buryat branch was formed in the Committee of the Party in Irkutsk Guberniya. At that time it was of the opinion that Buryat working class needed no ethnic autonomy. From this point of view, the policy of sovietization was enforced under the strong direction of the Party, and the First Congress of the Soviets in Irkutsk Guberniya was held in January 1921.

In Eastern Buryatiya, the Convention of Pribaikal Working Inhabitants in late March 1920 declared independence of the Far Eastern Republic and organized Government and its People's Revolutionary Army. It is said that at this time most of Russian representatives demanded a centralized government and that especially the partisan leaders denied the autonomy of the Buryat-Mongolians and blamed all the Buryats for their bourgeois nationalism. The Buryat National Revolutionary Committee, which was created in late March 1920, sent Rinchino and others to the

Joint Convention of Far-Eastern Regional Governments at Chita in late October 1920 to demand the independence. A clause of "Autonomy of the Buryat-Mongols" was specified in the Constitution of F.E.R. which was adopted in April 1921. "The Buriat-Mongolian Autonomous Territory" virtually came into existence in the convention of representatives of the Buryat autonomous organizations in April 1921. It was legalized in November 1921.

The Buryat branch of the Party insisted on the Western bourgeois democracy together with Mensheviks and the SRs until early July 1921. The Executive Committee of the Party in Irkutsk Guberniya attached great importance to the struggles against bourgeoisie and pseudo-communists and neglected the autonomy of the Buryat-Mongols. It was the Political Bureau of the Central Committee of the Party that promoted the formation of the Autonomous Territory to break the deadlock in the Eastern Siberia. The Convention for founding the Buryat-Mongolian Autonomous Territory in the R.S.F.S.R was held at Irkutsk in October-November 1921. The urgent problems were to consolidate the Buryat-Mongolian Autonomous Territories and to establish the cultural and ethnic relationship between Buriat and Khalkha. Later a compromise was made on these problems, and the Buryat-Mongolian Autonomous Territories were consolidated into "the Buriat-Mongolian Autonomous Republic" in December 1923.